

これからの教師に求められる資質～コロナ禍の社会に考える～

中 間 貴 之

1 はじめに

今年度もスポルトの先生方と教育について意見を交わすことで、教師としての高い使命感を改めて強くもつことができました。しかし、同時に理想と現実の差異を強く感じ、虚無感を抱くこともあります。

週が明けて、意気込んで向かう学校現場。“教育とはどうあるべきか”などと高尚な話を語っていた自分が虚しくなるほどに、目の前の仕事と児童の対応に追われます。自分の過ごす日々が本当に明日の教育を創っているのか、疑問を感じ、そして無力感を痛感するのです。

2 教師は社会を経験していない？

「教師は一度も社会を経験したことがない」教師はそう揶揄されることがあります。大学を卒業して、すぐに教師になり“先生”と呼ばれる。つまり、社会経験を積むことなく、教師となるから社会の道理を知らず一般的な常識を持ち合わせていない者が多いという理屈なのだと思います。私はこれに否定も肯定もしませんが、裏を返せば教師は一般社会の通念をもった者ではないという社会的な認識の強い表れなのでしょう。

確かに、教師は勉強に限らず、生活の細部に至るまで目を配らないといけない責務が存在します。また、我々が相手にする児童は生活地域こそ同じでも、生活環境は千差万別です。そのような児童の“先生”となる以上、教師は社会の実情をしっかりと把握し、社会通念に見合った指導を行うことが必要なのだと思います。そして、教師は社会を広く俯瞰できる視野を持ち合わせることが不可欠なのでしょう。

3 社会と教育

先述した通り、教師は社会の実情を鑑み、教育を進める必要があるとするならば、コロナ禍の教育を教師からの目線だけで語るのは狭すぎます。あらゆる面から多角的に捉えて教育を進めていく必要があります。ここではコロナ禍における社会の実情に注目してみたいと思います。

コロナウイルスが日本経済に大きく猛威を振るっています。厚生労働省によれば、新型コロナウイルス感染拡大に関連する解雇や雇い止めは、見込みを含めて累積9万185人になったとあります。(2月26日現在)失業者は増加の一途を辿る中、経済活動がかつてのように戻るにはまだ当分時間を要すると考えられます。また、2020年の1年間のGDPは-4.8%となり、リーマンショック以来のマイナス成長となっています。日本では、昨年4月事業総額108.2兆円

の過去最大の経済対策が取られ、12月には73兆円の追加経済対策も取られました。その影響もあり2月15日には、30年ぶりに株価が30000円を突破するというニュースも流れましたが、実体経済が弱まっている以上手放しで喜ぶことはできません。

2020年12月には、政府が2030年にガソリン車の販売禁止を打ち出したことも話題になりました。これは2050年に温室効果ガス排出を実質ゼロにする目標を受け、政府が打ち出したものです。世界の潮流として、脱炭素の実現がグローバルビジネス参画の最低条件となりつつある現代ではありますが、日本の主産業である自動車産業のビジネスモデルが崩壊する恐れすらある重大なニュースであるといえます。

コロナの感染者数の変遷ばかりメディアでは大きく取沙汰されていますが、世界では着実にコロナ収束後に視野を向けて、経済体制を構築し始めています。

教師に求められる資質とはこれら社会の潮流を敏感に察知し、児童に伝えるとともに社会について考えることではないでしょうか。ひいては、次世代の社会の担い手を養うことにつながるのだと考えます。

4 学校と民間の結びつき

学校は、とかく閉鎖的で社会と切り離された存在にありがちであると私は感じます。学校という組織内で物事が完結し、他者が入ることはほとんどないからです。学校が“次世代の社会の担い手を養う場”であるとするならば、学校はもっと社会に広く開かれたものでなくてはならないではないでしょうか。

以前、佐藤雅英先生から本校の研究についてご助言を頂いた際に、これからは公と民の垣根を越えて結び合うことが必要になってくるとお話を頂きました。具体的な話として、例えばホームセンターと学校が連携することで、体育授業の際に使用する教具の資材を提供してもらうことができるということでした。また、企業としても、学校と連携することで新たなビジネスチャンスを産むことができるということです。

学校の取り組みを広く社会に発信できることや、学校として社会のノウハウを吸収できること。そこに私は大きな可能性を感じました。

5 終わりに

私は冒頭に児童に向かう日々が、本当に明日の教育を創っているかということに疑念を抱いていると述べました。それは今この瞬間を切り取って児童と対峙しているからなのでしょう。長期的なビジョンをもち、児童の将来を見越して成長を育んでいく、そういった広い視野が教師にとっては必要なのだと考えます。目の前の子どもたちは、いつか大きく羽ばたいて日本を支えていく存在である。それを踏まえて、私自身も社会の構創をしっかりと学び、児童に伝え、ともに考える責務があると強く感じています。